

産業革命再考

——イギリス綿紡績業の成長，1780—1834年——

田 中 章 喜

目 次

- | | |
|------------------|--------------------|
| 1 はじめに | 4 19世紀前半の綿紡績業 |
| 2 1780年代のミュール紡績業 | (1) 準自動ミュール紡績工場の出現 |
| 3 1790年代の小親方と工場主 | (2) 商人資本家による産業の制覇 |
| (1) 紡績場と工場 | 5 おわりに |
| (2) 産業成長における役割 | 付録 |
| (3) 紡績業者の出身階層 | |

1 はじめに

イギリス産業革命については、イギリスで言うセルフ・メイド・マンの学説、日本で言う小生産者の発展説という学説が存在し、現在でも多くの研究者の強い支持を受けている。そして、従来の研究によれば、その学説にもっとも適合的な事例が18世紀末から19世紀初頭におけるランカシャのミュール紡績業であるとされてきたといつてよい。

そうした学説は19世紀の多くの同時代文献にまで遡ることが出来る。ピーター・ギャスケルが1833年に書いた書物には、イギリス綿紡績業では裕福な者で仕事を始めた者は失敗し、逆に貧しき者が成功したと述べているし、ミュールの発明者であるサミュエル・クロンプトンの伝記を1859年に著したギルバート・フレンチは次のように述べている。

「多くの勤勉な者はたった1台のミュールを自分で動かすという形で仕事を始め、資産が増えるに伴って機械を増やし、徐々に事業を拡大していった。そうして初めて、彼らはイギリスにおけるもっとも役に立つ大製造業者として、

名誉ある名声を獲得した⁽²⁾」。1859年には、サミュエル・スマイルズがそうした「セルフ・メイド・マン」の成功物語を集めた『自助論』、すなわち日本で言う『西国立志編』が当時のイギリスのベスト・セラーとなったのであった。

その後、こうした言説は多くの研究者によって強く支持され、学説として洗練されてきた。産業革命期イギリス綿紡績業に関連する研究の多くはその影響を多かれ少なかれ受けていることが分かる⁽³⁾。とりわけ、日本においては、大塚久雄と中川敬一郎によってそうした学説がイギリス産業革命の小生産者の発展説と呼ばれ、その妥当性が強く主張されてきただけでなく、数多くの研究者に強い影響を及ぼして来た⁽⁴⁾といっていよい。

そして、イギリス産業革命に関する小生産者の発展説と呼ばれるものは次の3つの命題を主たる柱としているといえよう。第1に産業革命期のイギリス綿紡績業の発展は農村家内工業或いはプロト・インダストリーから連続的な発展を遂げ工場制生産を確立した。第2に、イギリス産業革命を担った企業家は商人や地主ではなく、「卑しい生まれの者」、つまり「下層」階級出身者であった。第3に、産業革命期の急激な産業発展は、外部の資本、例えば商人資本のもとで蓄積されたような資本の参入ではなく、生産者が獲得した利潤の再投資によってもたらされた。およそ、以上のような命題によって表現可能であろう。

しかし、こうした命題は、現在の研究状況においても高い有効性を持ち、再検討の余地がないのであろうか。小生産者の発展説を唱えてきた従来の研究は、充分なる歴史的根拠に基づいてきたわけではないし、また、近年の海外のいくつかの研究においては、その妥当性を否定するリサーチが行われ始めているのである⁽⁵⁾。そこで、ここでは、従来、もっとも小生産者の発展をたどったと言われてきたイギリスのミュール紡績業の発展過程を対象に、単に海外の新しい研究を利用するだけでなく、私自身の独自のリサーチの結果を利用して、先の命題に表される小生産者の発展説を検証してみよう。

注

(1) P. Gaskell, *The Manufacturing Poulation af England* (1833), p. 45.

- (2) G. J. French, *The Life and Times of Samuel Crompton* (1860), p. 119.
- (3) 例えば以下のものがある。S. J. Chapman, *The Lancashire Cotton Industry* (1905); P. Mantoux, *The Industrial Revolution in the Eighteenth Century* (1906: Translated by M. Vernon, Rev. ed., 1961, 徳増栄太郎・井上幸治・遠藤輝明訳『産業革命』東洋経済新報社, 1964年); G. W. Daniels, *The Early English Cotton Industry* (1920); T. S. Ashton, *The Industrial Revolution 1760-1830* (1948, 中川敬一郎訳『産業革命』岩波文庫, 1973年); N. J. Smelser, *Social Change in the Industrial Revolution* (1959); S. Shapiro, *Capital and the Cotton Industry in the Industrial Revolution* (1967); P. Mathias, *The First Industrial Nation* (1969, 小松芳喬監訳『最初の工業国家』日本評論社, 1972年); F. Crouzet, 'Capital Formation in Great Britain during the Industrial Revolution', in *Capital Formation in the Industrial Revolution* (1972), ed. by F. Crouzet; C. H. Lee, *A Cotton Enterprise 1795-1840* (1972); D. A. Farnie, *The English Cotton Industry and World Market, 1815-1896* (1979); F. Crouzet, *The First Industrialists* (1985).
- (4) この点に関連した大塚と中川の著作は数多いが、産業革命期イギリス綿紡績業を直接扱っているものとして、以下の文献を参照されたい。大塚久雄『近代資本主義の系譜』（『大塚久雄著作集』第3巻, 岩波書店, 1969年）, 同『いわゆる問屋制度をどう捉えるか』（『大塚久雄著作集』第11巻, 岩波書店, 1986年）, 中川敬一郎『イギリス綿業における工場制度の成立』（1951-2年, 同『イギリス経営史』東京大学出版会, 1986年）。また、日本においても中川の研究以降、産業革命期イギリス綿紡績業の研究がいくつかおこなわれてきたが（例えば、井上巽「産業革命期におけるイギリス綿業の構造変革」『土地制度史学』19号, 吉岡昭彦編『イギリス資本主義の確立』御茶の水書房, 1968年, 堀江英一編『イギリス工場制度の成立』ミネルヴァ書房, 1971年, 鈴木良隆『経営史』同文館出版, 1982年, 茂木一之「イギリスミュール型紡績工場の跋行的技術発展と職場労働力構成」『高崎経済大学附属産業研究所紀要』13号, 杉浦克巳「マコンネル・ケネディ」『社会科学紀要』32輯, 永田正臣「綿紡績業における工場制度の成立」同編『産業革命と労働者』ミネルヴァ書房, 1985年など）, 中川自身の研究史の回顧を見ても分かるように（中川, 前掲書, 83-90頁）, 産業革命期イギリス綿紡績業に関しては小生産者の発展説が現在でも依然として有力な学説とされているといえよう。
- (5) 例えば以下のような研究がある。M. M. Edwards, *The Growth of the British Cotton Industry* (1967); S. D. Chapman, 'Fixed Capital Formation in British Cotton Industry, 1770-1815, in *Aspects of Capital Investment in Great Britain, 1750-1850* (1971), eds. by J. P. Higgins and S. Pollard; J. H. Fox, 'The Victorian Entrepreneurs in Lancashire', in *Victorian Lancashire* (1974), ed. by S. P. Bell; S. D. Chapman, 'Financial Restraints on the Growth of Cotton Firms in the English Cotton Industry, 1790-1850', *Economic History Review*, 2nd Ser., XXXIII (1979); K. Honeyman, *Origin of Enterprise* (1982); A.

Howe, *The Cotton Masters 1830-1860* (1984).

2 1780年代のミュール紡績業

ミュール紡績業はランカシャ地方の農村家内工業として開始され、その後、そうした農村家内工業に従事する小生産者のたゆまぬ努力によって19世紀イギリス綿工業の繁栄が築かれたと言われてきた。そこで、まず初めにミュール紡績機の発明が公開された1780年から1788年恐慌までの時期についてのミュール紡績業が、従来言われてきたように、「下層」階級の者でも始めることができ、しかもジェニー紡績業や織布業と同質的な農村家内工業として広くおこなわれていたかどうかを調べてみよう。

表 1 イギリスにおける紡績機の普及状況

		1783	1788	1790	1804	1811
ミュール	総紡錘数	1000	49,500	700,000	1,515,500	4,209,570
	一台平均紡錘数	40	90	(117)	—	—
	台数	(25)	550	6,000	—	—
ジェニー	総紡錘数	—	1,605,600	1,400,000	—	155,880
	一台平均紡錘数	—	80	(70)	—	—
	台数	—	20,070	20,000	—	—
アークライト	総紡錘数	—	286,000	310,000	—	310,516

〔典拠〕 1783年は、Kennedy, *Brief Memoir*, p.15, 1788年は、Colquhoun, *An Important Crisis*, p.4, 1790年は、*Case of the British Cotton Spinners and Manufacturers*, Appendix, 1804年は、Aston, *The Manchester Guide*, p.278 (但しこの数字はマンチェスタとその近郊都市だけのものと思われる), 1811年は、Daniels, 'Samuel Crompton's Census of the Cotton Industry in 1811', p.118. カッコの中の数字は他の数字から算出したもの。

多くの研究はミュール紡績機はクロンプトンによる発明の公開後、1780年代⁽¹⁾に急速に広まったと言われてきたが、実際には、この時期のランカシャ地方においては非常にマイナーな珍しい存在であった。表1を見れば分かるように、少なくとも80年代においてはミュール紡績機の普及は急速なものではなく、当

時ランカシャの農村家内工業として広範におこなわれていたジェニー紡績業に比べれば、ミュール紡績業は全く取るに足りない存在であったといえよう。事実、この時期にボルトンで綿工業に従事していた者が、当時においては「ミュールはひとつのミステリーであった」と述べているように、ミュール紡績機は珍しい存在であったし、同時代の有名な百科全書である『チェインバーズ百科』にも、アークライト紡績機やジェニー紡績機についての叙述はあっても、ミュール紡績機についての叙述は見当たらないぐらいなのである。⁽³⁾

ミュール紡績機の発明後の普及が緩慢であったのは、ある意味では当然であった。発明者クロンプトンが80年におこなったミュール紡績機の公開は広く一般大衆に向かっておこなわれたわけではなかった。彼は金を支払った一部の者にだけミュールを公開したのである。⁽⁴⁾そのうえ、彼はその公開後も、ミュールの秘密隠匿に努めた。当時紡績機械製造業者のもとで機械工として働いていたマコンネルやケネディが、80年代末にクロンプトンの家に梳綿機を納入した時ですら、彼らはミュールがどのような機械であるかも知らなかったし、クロンプトンにミュールを見せてもらうことも出来なかった。⁽⁵⁾19世紀のマンチェスター機械製造業の重鎮であるウィリアム・フェアバーンが、この時期、製造されていた紡績機械は「梳綿機、ジェニー紡績機、水力紡績機」に限定されていたと述べているように、ミュール紡績機を製造販売する製造業者もいなかった。⁽⁶⁾また、当時すでに大規模な水力紡績工場を所有し、かつ80年のミュールの公開を受けているロバート・ピールですら、数多くの有能な機械工を擁していたにもかかわらず、87年まではミュール紡績業に進出することが出来ずにいた。⁽⁷⁾また、ミュール紡績機自体、80年代においては未だ改良の余地を数多く残す発展途上の機械でもあった。⁽⁸⁾

こうしたことから、ミュール紡績業は機械の優秀な性能にもかかわらず、急速な発展が見られなかったのは当然であった。同時に、また、そうした80年代のミュール紡績機を巡る状況からすれば、この時期のミュール紡績業が、当時のランカシャ地方に広まっていたジェニー紡績業や織布業といったものと同質的な農村家内工業であったと見ることはむずかしいと思われる。勿論、数は少

ないとはいえ、当時のミュール紡績業が農村家内工業としてランカシャー地方で営まれていたことは確認できる。⁽⁹⁾その意味では、ミュール紡績業は、広範なひろがりにはなかったが、農村家内工業として存在していたと言えるかもしれない。だが、それが、ジェニー紡績業や織布業といった農村家内工業と同質的な産業であったとは見なしにくい。ジェニー紡績業や織布業の場合は、誰もが容易に機械を入手して自宅で営むことができたのに対して、ミュール紡績業は、ミュール自体の入手が非常に困難であったがために、簡単に農村家内工業として営むことが出来なかったといえよう。当時のミュール紡績業は、所謂下層階級の自宅で広く営まれていたのではなく、ミュールについての情報をなんらかの形で獲得し、かつ自らミュールを制作出来たような、一部の特殊な者のみによって営まれていたと思われる。その意味では、80年代のミュール紡績業は非常に特殊な性格を持ったいわばマージナルな産業であったと考えられる。

以上のように、80年代のミュール紡績業は、ジェニー紡績業や織布業のように農村家内工業として急速な発展を遂げることが出来ず、非常に特殊な形でランカシャーの地方で細々と営まれていたに過ぎないのである。

注

- (1) 例えば, French, *op. cit.*, p. 76; Smelser, *op. cit.*, p. 110 を参照されたい。
- (2) C. Aspin, *James Hargreaves and the Spinning Jenny* (1964), p. 64.
- (3) *Cyclopedia or an Universal Dictionary of Arts and Sciences* (1786).
- (4) Daniels, *The Early English Cotton Industry*, pp. 168-9; French, *op. cit.*, pp. 68-72.
- (5) *Ibid.*, pp. 72, 72, 89-90.
- (6) W. Fairbairn, *A Brief Memoir of the Late John Kennedy* (1860), p. 3.
- (7) French, *op. cit.*, pp. 79, 267; S.D. Chapman, 'The Peels in the Early English Cotton Industry', *Business History*, XI (1969), p. 67.
- (8) E. Baines, *History of the Cotton Manufacture in Great Britain* (1835), p. 347; French, *op. cit.*, p. 85.
- (9) J. Kennedy, *Observations of the Rise and Progress of the Cotton Trade in Great Britain* (1818), p. 15; French, *op. cit.*, pp. 86-88; Aspin, *op. cit.*, p. 64.

3 1790年代の小親方と工場主

(1) 紡績場と工場

1780年代のミュール紡績業の発展が緩慢であったのに対して、88年恐慌後から1790年代にかけて、ミュール紡績業は急速な発展を開始する。ロバート・オウエンは、この時期に「ミュールという優れた機械であり、綿紡績業界の偉大で常識を越えた発明がマンチェスタに導入され始めた」と述べているし、ウィリアム・ラドクリフはランカシャの織布業で初めて広汎にミュール糸が使用され始めたのがこの時期であると述べている。表1を見ればわかるように、この時期のミュール紡績機の普及は急激で、90年代にはミュール紡績業がイギリス綿紡績業の中で、すでに重要な地位を築いていることが分かる。ミュール紡績業の発展の実際の開始時期は、1788年恐慌後であるといえよう。

こうした発展は、直接的には、ミュールについての情報が容易に入手出来るようになり、機械の改良が進展して、ミュール紡績機の入手が一般に可能となったからであろう。事実、以前ミュール紡績機が持っていた構造上の欠陥は、様々な者の努力によって克服されていった。ミュール紡績機を製造し、一般に販売する業者もランカシャ地方に数多く出現するようになった。『マンチェスタ・マーキュリ』という当時の新聞には、88年恐慌前には見られなかったミュール紡績機の宣伝広告を90年代の紙面には数多く見ることが出来る。

それでは、この90年代のミュール紡績業の最初の発展は、所謂小生産者的な発展を体現する小生産者の紡績場だけによって担われていたのか、それとも非農村家内工業的な工場が、その発展の最初の時期から出現していたのかどうかを調べてみよう。

マンチェスタの紡績工は、1818年に次のように述べている。

「蒸気機関がまだ使われていなかった綿工業の幼年時代には、小親方と呼ばれる者が大勢いた。彼は、少しの資本でいくらかの機械を買い、数人の労働者を雇っていた」。

実際に、この時期にミュール紡績業を営む小親方の紡績場の存在をマンチェスタ、ストックポート、オルダムなどの諸都市に確認できる。⁽⁶⁾そこで、90年代の小親方の作業場の具体的な機械装備をみてみよう。

ミュールの発明者クロンプトン⁽⁷⁾は、オルダムやボルトンの地で、自身の住居の屋根裏部屋に2台のミュールと後には1台の梳綿機を備え付け、家族とともにミュール紡績に従事していた。オウエンは、マンチェスタの工場の1フロアを賃借し、そこに3台のミュールを置いて3人の紡績工を雇い入れる小親方としてミュール紡績業に携わっていた。⁽⁸⁾後に、マンチェスタの大資本家となるマコンネルも、当初は2台のミュールで紡績業を営む小親方であった。⁽⁹⁾こうしたことから、この時期のミュール紡績小親方は、ミュール2—3台を主たる生産手段とし、動力として人力や馬力を利用し、自宅や賃貸した建物の一部を自らの紡績場としていたといえよう。また、準備工程機が完備していないことから、彼らの多くは原綿からの一貫生産ではなく、半製品である梳綿や粗糸を原料としてミュール糸の生産をおこなっていたといえよう。⁽¹⁰⁾

しかし、最初のミュール紡績業の本格的発展が、こうした小親方の作業場だけによって担われていたのではなかった。オウエンは、「綿糸紡績は大分儲かるというので、資本を持っている多くの人々の注意を引き始め」、彼らによって次々と「工場」が建てられていったと述べている。⁽¹¹⁾事実、マンチェスタには、82年にはアークライト紡績工場が2つしかなかったが、⁽¹²⁾94年には「数多くの工場が存在する」と言われるほどになっており、⁽¹³⁾また、ストックポートでも⁽¹⁴⁾95年には多くの紡績場とは別に23もの綿工場が存在している。このように、産業成長の最初の時期から小親方の紡績場とは区別される比較的大規模な工場が、マンチェスタなどのランカシャの諸都市に数多く出現しているのである。

しかも、こうした工場は、各部屋が賃貸に出されて多くの小親方によって分割されていたものばかりではない。どちらかと言えば、当時のミュール紡績工場の多くは、1のつ企業によって所有、経営され、原綿から糸への一貫生産をすでにおこなっていたといっていよい。だから、こうした工場は、その規模において、先の小親方の紡績場とは格段の違いがあった。そこで、具体的な機械装

備が判明している当時の手動ミュール紡績工場を列举してみよう。

マンチェスタ最初のミュール紡績工場は、ピーター・ドリンクウォーターによって建てられた。彼の通称バンクトップ工場は4階建で、1台144紡錘のミュールと多くの準備工程機だけでなく蒸気機関も装備され、90年代の初めで約500人の労働者が働いていた。⁽¹⁵⁾ デイヴィッド・ホルトのホルトタウン工場は、6階建の新旧2つの工場からなっていた。旧工場には、57台の梳綿機と38台のアーライト紡績機の他、数多くの他の機械も装備され、1台平均184紡錘のミュール紡績機が18台も据え付けられ、新工場には、18台の梳綿機などとともに、1台平均144紡錘のミュールが21台装備されていた。そして、動力源としては、前者では大水車と蒸気ポンプ、後者では蒸気機関が使用されていた。⁽¹⁶⁾ グラントとウェイクフィールドのマンチェスタの紡績工場には、水車1つと蒸気機関2つが動力として使われ、数多くの準備工程機と総数544紡錘にのぼるアーライト紡績機などの他に、全体で2800紡錘にも達する数多くのミュール紡績機があった。⁽¹⁷⁾ サミュエル・オールドノウはすでに大規模な水力紡績工場を所有していたが、彼も91年にストックポートにミュール紡績工場を建てている。そこには、蒸気機関や14台の梳綿機と56台のミュールがあり、およそ150—170人もの労働者が働いていた。⁽¹⁸⁾ ジェイムズ・ドクソンのストックポートの工場には、⁽¹⁹⁾ 多くの準備工程機と87台のジェニー、11台のミュールがあった。

このように、90年代に出現した手動ミュール紡績工場は、同時期に存在した小親方の紡績作業場とは格段の違いを持った大規模なものであり、梳綿機などの準備工程機から最終工程機であるミュール紡績機までもが備えられていることから、多くの小親方の紡績場とは違って、すでに原綿から糸への一貫生産がおこなわれていただけでなく、手動ミュール紡績機以外の機械を動かす動力として、当時としては最新の蒸気機関が使われていたことが分かる。しかも、こうした工場は88年恐慌から90年代初頭にかけての短期間のあいだに続々と出現したといってよい。つまり、小親方の作業場の出現とそれとは区別される紡績工場の出現はほぼ同時に起こったことといえよう。1790年代におけるミュール紡績業の最初の急速な発展は、小規模な紡績作業場だけではなく、数多く出

現した比較的大規模な工場によっても担われていたといわねばならないのである。

（2）産業成長における役割

それでは、1790年代のミュール紡績業の発展に紡績場と工場がそれぞれ果たした役割はどのようなものであったのだろうか。最初の産業発展を主導したのはどちらであったのかを調べてみよう。

そのためには、小親方の紡績場と工場主の工場とが、具体的にどのような比率で存在し、どちらが当時の紡績業における資本形成に大きく寄与していたかを知る必要がある。しかし、この時代においては、そうした統計資料はそのままでは存在しない。そこで、当時のランカシャ地方の代表的な都市における紡績作業場と工場の数を、それぞれの事業主の資本規模を火災保険会社の一次資料に基づいて調査し、一都市全体において、それらがどうであったのかを確定してみよう。

当時のミュール紡績業の盛んな代表的都市の1つであるストックポートにつ

表 2 1795年ストックポートの綿紡績業者の資本規模

	資本規模	人数	累計(比)	平均
工 場	5000—	9	57,800 (59)	6,422
	2000—5000	4	12,590 (13)	3,148
	1000—2000	3	4,340 (4)	1,447
	£ 0—1000	1	960 (1)	960
	小 計	17	£ 75,690 (77)	4,452
紡績場	2000—	2	5,400 (5)	2,700
	1000—2000	5	5,700 (6)	1,140
	500—1000	8	5,420 (5)	678
	200— 500	13	4,225 (4)	325
	100— 200	19	2,160 (2)	114
	£ 0— 100	1	50 (—)	50
	小 計	48	£ 23,055 (23)	480
合 計		65	£ 98,745(100)	1,519

〔典拠〕 S.D. Chapman, 'Fixed Capital Formation', pp.99-100 より集計。百分率はそれぞれ四捨五入してあるので合計しても100にはならない。以下同様。

いては、S・D・チャプマンによるリサーチを利用できる。それ（表2）によると、1795年におけるストックポート綿紡績業では、小親方が48人、工場主が17人と相対的には小親方の数が多いにもかかわらず、両者の間の資本規模の格差は大きく、街全体の綿紡績業における資本形成においては、小親方が全体のおよそ4分の1を形成しているのに対して、工場主は全体のおよそ4分の3を形成していることが分かる。つまり、ストックポートにおいては、小規模作業場の数は相対的には多いが、全体の資本形成に果たした役割は小さく、総数としては相対的に少ない大規模工場が資本形成において決定的な意味を持っていたことが分かる。⁽²⁰⁾

但し、ストックポートは当初から大規模工場が支配的であったとも言われているので、ミュール紡績業の小生産者の発展を代表すると従来考えられてきた都市ではどうであったのかを調べてみる必要がある。そこで、今までの研究で小生産者の発展を遂げたもっとも典型的な産業都市と言われ、なおかつ18世紀末から19世紀にかけてのイギリス綿紡績業を代表する産業都市となったマンチェスタについて調べてみよう。現在ロンドンのギルドホール図書館にあるロイヤル保険会社とサン保険会社の1795年の帳簿を利用して、マンチェスタの紡⁽²¹⁾

表3 1795年マンチェスタ綿紡績業者の資本規模

資本規模	企業数	累 計	平 均
10,000—	4 (4)	51,700 (26)	12,925
5,000—10,000	10 (10)	66,900 (33)	6,690
2,000— 5,000	12 (13)	34,900 (17)	2,908
1,000— 2,000	24 (25)	28,270 (14)	1,178
500— 1,000	16 (17)	10,610 (5)	663
200— 500	22 (23)	6,470 (3)	294
100— 200	8 (8)	1,095 (1)	137
£ 0— 100	0 (0)	0 (0)	0
合 計	96(100)	199,945(100)	2,083

〔典拠〕 Royal Exchange Assurance Co. MSS., Registers, 2nd Ser., Vols. 28-31 (1793-1796); Sun Insurance Office MSS., Registers, Ser. CD, Vols. 7-12 (1794-1796) から、マンチェスタ綿紡績業者の一社ごとの火災保険評価総額を収集し、それらを集計。

績業者を独自にリサーチした結果が表3である。

これから分かるように、マンチェスタの綿紡績業においても、小規模な経営体と大規模な経営体が当初から併存し、しかも、資本規模が千ポンド以上の比較的大規模な紡績業者が街の産業全体の資本額の90%を占め、資本規模5千ポンド以上の紡績業者だけでも全体の59%も占めていることが分かる。勿論、資料の性格上、小規模作業場の数値は過少評価されていると考えられるが、それを考慮に入れたとしても大規模な工場が資本形成において大きな役割を果たしたことは否定出来ないと思われる。

ということは、小親方の作業場は数としては相対的な多数を占めてはいたが、ミュール紡績業全体の資本形成におけるその役割は小さく、小親方の作業場とは異なる工場主の工場が資本形成において決定的な役割を果たしていたといえよう。90年代の最初のミュール紡績業の急速な発展は、小親方の作業場ではなく、都市の大規模な工場によって主として担われていたといっていよい。

その上、一般的に、当時の小親方の紡績場は、それ自体で存続出来る独立した経営ではなく、商人による問屋制支配に依存することによって、初めてその存続が可能とされていたことを指摘しなければならない。いいかえれば、多くの彼らの経営は、問屋制支配が存在するからこそ、この時期において成立可能であったと見る事が出来る。

先に見たように、当時の大規模な工場ではミュール糸の一貫生産がすでにおこなわれていたが、多くの小親方の紡績場では半製品である粗糸や梳綿をミュールによって精紡して完成品である糸が作られており、一貫生産はおこなわれていなかった。ところで、ミュール紡績機による精紡に使用可能な半製品は限られていた。ミュールは、家内工業で使用されてきた道具によって生産される梳綿や粗糸を原料には出来ず、当時最新のアークライト型梳綿機などによって製造されたものしか使用出来な²²かった。ところが、当時、そうした梳綿や粗糸を多量に生産しているのは、主として大規模な工場だけであったため、小親方は原料である梳綿や粗糸を外部から購入する必要があった。

さらに、小親方が生産したミュール糸の販売には、原料の購入以上に問題が

付きまとった。周知のようにミュール糸は、当時は主としてモスリンやキャ
 コなどを生産する織布業で使用されたのであるが、その織布業では、織布工が
 商人によって問屋制支配されていた。だから、小親方が織布工を自ら問屋制支
 配でもしない限り、彼らに直接ミュール糸を売るのは出来なかったと見てよい
 だろう。また、クロンプトンがマンチェスター取引所で自ら生産したミュール糸
 の販売に失敗したように、小親方が自由にミュール糸を販売出来る市場も当時
 は存在しなかったのである。

こうした状況のなかで、小親方は商人資本による問屋制支配に依存せざるを
 えなかった。事実、当時の多くのミュール紡績小親方は、粗糸・梳綿などとい
 った原料の前貸を受け、それらをミュール糸にして納入し、そのなかで工賃を
 手に入れるという問屋制支配を受けていた。こうした問屋制支配は、当時にお
 いては委託紡績と呼ばれ、ランカンシャ地方全域でおこなわれていた。この委託
 紡績の中で小親方は資金の前貸や機械の貸与をも受けていた。なお、興味深い
 ことには、こうした紡績業における問屋制支配は、純然たる商人だけによって
 行われていたのではなく、新しい紡績工場主によってもおこなわれていた。当
 時の紡績工場主の多くは自分の工場で製造される半製品の一部を利用して小親
 方の問屋制支配をおこなっていたのである。この時期の工場主は糸の製造者で
 ありながら、同時に問屋制支配をおこなう商人資本家でもあった。

いずれにせよ、こうした商人資本家による問屋制支配、すなわち彼らの商人
 資本的蓄積の存在があって、初めて、多くの紡績小親方の経営が存続可能であ
 ったのである。

以上のように、ミュール紡績業の最初の発展期である1790年代における産業
 発展を主として担ったのは、小親方の紡績場ではなく、比較的大規模な工場
 の方であった。しかも、小親方は独立した小生産者ではなく、商人資本家によ
 って問屋制支配される小生産者であったのに対して、他方の工場主は工場生産を
 おこないながらも、同時に問屋制支配という商人資本的蓄積をも積極的ににおこ
 なる商人資本家でもあったのである。また、そうした商人資本家による問屋制
 支配の存続が、小生産者である小親方の経営をある程度残存させたと見てよい

だろう。

（3）紡績業者の出身階層

次に、90年代の最初の産業発展を担った小親方と工場主がそれぞれどのような出身階層を持っているかを調べてみよう。

当時のミュール紡績業への参入障壁は、必要投資資本総額で代表出来よう。小親方になるには、最低ミュール紡績機が1—2台必要であり、ミュールの価格がどの程度であったかが重要なポイントとなろう。そこで、90年代の手動ミュール1台の価格を調査してみると、それがかなり高価なものであったことが分かる。ミュール紡績機の価格は紡錘数という機械の大きさに比例しており、大型のものでは1台60—70ポンド、かなり小型のものでも1台およそ30—40ポンドはしたことが分かる。⁽²⁹⁾一方、当時のランカシャ地方の典型的な農村家内工業であったジェニー紡績業や織布業で使用されていた機械は、それぞれ1台あたり、ジェニー紡績機は約6ポンド、織機は5ポンドとミュールに比してとても安価であった。⁽³⁰⁾このように、ミュール紡績機自体、ジェニー紡績機や織機のように安くはなかったのである。

そして、「下層」階級の年収はミュール紡績機を簡単に購入出来るほど高くはなかったといつてよい、当時のランカシャの平均的な農夫の年収で1ポンド8シリング、⁽³¹⁾「下層」階級のなかでも高賃金であった熟練職種の職人ですら、その年収は約44ポンドであった。⁽³²⁾「下層」階級の者にとって、ジェニー紡績機や織機に比べれば、ミュール紡績機は入手がかなり困難なものであったといつてよい。しかも、小親方として事業を始めるには、ミュールの他にも様々な資本が必要で、それらを総計すれば、少なくとも100ポンド前後にはなったであろう。当時の下層階級にとって、ミュール紡績業に小親方として参入することは、ジェニー紡績業や織布業を始めることに比べれば、とてもむずかしいことであったといえよう。「下層」階級の者でミュール紡績業に参入出来た者は、その参入以前に、すでにある程度の資産を形成していなければならなかったのである。

だとすれば、ましてや「下層」階級の者が工場主になることは、この時期に

においてさえ、かなり困難なことであったと見る事が出来る。先に見たように、当時の多くのミュール紡績工場主の資本規模は、すでに軽く千ポンドを越えていただけでなく、1万ポンド以上の規模を持つ巨大紡績業者も存在していた（表2・3）。こうしたことから、小生産者出身の者がミュール紡績工場主になることは非常に可能性の低いことであったと考えられよう。

そこで実際に当時の手動ミュール紡績工場主であった者がどのような社会的起源を持つ者であったのかを調べて見よう。この点についても、S・D・チャプマンのリーサーチを利用出来る。彼は1795年におけるイングランド北部の上位43社の大規模綿紡績工場主の個人データを調査し、その社会的起源を調べている（表4）。これによれば、それらの企業の半数以上が商人出身の資本家によって担われていただけでなく、主要企業全体の資本総額の76%が商人資本家の投資によって形成されており、しかも、「下層」階級の出自を持つ企業は3企業だけで、その数は非常に少なかったことが分かる。

表4 1795年の主要綿紡績企業43社の社会的起源

社会的起源	企業数	資本規模
マンチェスター・ファスチアン商人	12	255,960 (33)
地方商人	10	88,000 (12)
綿プリント業者・商人	4	234,590 (31)
機械工・経営者・「生まれの卑しき者」	3	65,050 (8)
羊毛・絹産業からの移動	8	64,450 (8)
ロンドン、ミッドランドの繊維業からの移動	6	57,650 (8)
合 計	43	£ 765,700(100)

〔典拠〕 S.D. Chapman, 'Fixed Capital Formation', p.72.

但し、このチャプマンの調査はミッドランズのアークライト紡績工場主がかなり含まれていることに注意しなければならない。というのも、従来からアークライト紡績業では商人資本家が工場主になる傾向が強かったと言われてきたからである。だから、当時のミュール紡績工場主を主たる対象とした場合、同様な結果が出るかどうか調べられる必要がある。

そこで、先の火災保険会社の調査によって明らかになった1795年のマンチェ

産業革命再考（田中）

スタの綿紡績業者96社を対象として、それらの綿紡績業参入以前の経歴を独自にリサーチした結果が付録1と付録2であり、それをもとにマンチェスタ全体の資本形成における割合を集計したものが表5である。

表 5 1795年マンチェスタ綿紡績業者の社会的起源

出身階層	企業数	総資本形成額
商人	34	142,455 (71)
「下層」階級	7	12,350 (6)
不明	55	45,140 (23)
合計	96	£ 199,945(100)

〔典拠〕 Royal Exchange Assurance Co. MSS., Registers, 2nd Ser., Vols. 28-31 (1793-1796); Sun Insurance Office MSS., Registers, Ser. CD, Vols. 7-12 (1794-1796); 付録 1-2.

この調査によれば、1795年のマンチェスタ綿紡績業においては、総数96社のうち、商人出身者が34社、「下層」階級出身者が7社で、不明である者が55社とかなり多いが、産業全体における資本形成額をみると、前者が全体の71%、後者は全体の6%をそれぞれ占めていることが分かる。勿論、資料の性格上、ここでも小規模な紡績業者のかかなりの部分は含まれていないともいえるし、また、起源が不明の者の場合、そこには「下層」階級出身者が多く隠れているとも解釈可能であろう。だが、そうした事情を考慮に入れたとしても、表5によって示された商人資本家出身者による資本形成額の圧倒的な数値を見れば、彼らによるマンチェスタ綿紡績業の支配は不動であるといえよう。最初に出現した綿紡績工場の多くは、商人資本的蓄積によって形成された資本が綿紡績業へ投資されたことによって、主として創造されたのであり、商人資本家のミュール紡績業への新規参入が90年代のミュール紡績業の急速な発展をもたらした大きな原因であったといってよい。

これとは逆に、小親方や小生産者が経営規模の拡大に成功し、工場主になること自体、この時期においても例外的な事象であった。しかも、数少ないそうした事例を見てみると、彼らが所謂小生産者的発展を遂げて工場主になったわけではないことが分かる。

まず第1に、彼らの場合、自分自身の資金だけではなく、外部の商人などの

資産家の援助によって、経営拡大に成功していることである。ジェイムズ・マコンネルとジョン・ケネディの場合、経営拡大の大きなステップとなったのは、スリーピング・パートナーとしてファスチエン商人であったサンドフォード兄弟と資本結合したことであった。⁽³³⁾ また、一介の職人であったジョン・ジョーンズは、「かなりの資産を持った資本家」と、⁽³⁴⁾ ウィリアム・ライトは織布業者トマス・ホワイトとパートナーシップを組む中で、⁽³⁵⁾ 工場主になっているのである。つまり、こうした者は資金力のある者とパートナーシップを組むことを経営規模拡大の大きなステップにしていたといつてよい。

第2には、彼らの多くは、単なるミュール紡績小親方ではなかったことである。⁽³⁶⁾ マコンネルとケネディ、⁽³⁷⁾ ジョーンズ、ライトも、いずれもミュール紡績業だけでなく、紡績機械製造業をも営んでいた。いうまでもなく、紡績機械の製造販売業は、委託紡績業のように商人によって問屋制支配されることもなく、高収益が獲得出来たのである。

そして、第3には、彼らの多くはミュール紡績業を委託紡績としておこなっていたのではなく、小規模ながらも自ら他の小親方を問屋制支配する商人としての活動もおこなっていたことである。マコンネルとケネディやジョーンズは、自らの工場で出来る梳綿や粗糸を利用して、他の小生産者や小親方を問屋制支配していた。⁽³⁸⁾ また、のちにプレストンの大工場主となるサミュエル・ホロックスは、石工出身ではあるが、当初から織布工を支配する製造業者としての活動をおこない、⁽³⁹⁾ 紡績工場主になっている。

こうしたことから、当時の小親方で経営規模の拡大に成功し、工場主となっている者の場合、単なる小親方として小生産者的な発展を遂げた事例とは見なせない。彼らの多くは、商人的な行動を積極的に選択していたのであり、資本結合によって外部の資本に依存することが出来たとともに、機械製造業などの紡績業以外の事業のメリットを享受していたのである。

実際、ミュールの発明者クロンプトンは、そうした行動を選択することがなかったために、90年代においても依然として小親方に留まっていた。彼が80年代から委託紡績の仕事に従事するなかで獲得したものといえわずかに小型の

梳綿機1台だけであった。⁽⁴⁰⁾これに対して、クロンプトンを問屋制支配したことがあるボルトンの綿製造業者ヘンリ・アシュワースは、3—5千ポンドにものぼる財産を残して死んでいる。⁽⁴¹⁾こうしたことは、クロンプトンがなにも小親方として失格であったのではなく、問屋制支配を受ける小親方である限り、経営規模の拡大が非常に困難であったことを示すものといえよう。事実、多くの小親方は、委託紡績主から資金や機械の貸与を受けなければならないほどであった。小親方階層の工場主階層への流動性は、1790年代においてもかなり低かったといわねばならないのである。

注

- (1) R. Owen, *The Life of Robert Owen* (1857), Vol. I, p. 22 (五島茂訳『オウエン自叙伝』岩波文庫, 1961年, 50頁, 但し訳は必ずしも従っていない, 以下同様)。
- (2) W. Radcliffe, *Origin of the New System of Manufacture* (1828), p. 65.
- (3) J. Kennedy, *Brief Memoir of Samuel Crompton* (1830), pp. 14, 18-9.
- (4) 私が調べた限りでは、『マンチェスタ・マーキュリ』にミュールに関する記事が現れるのは1789年が最初である。*Manchester Mercury*, 29 December 1789.
- (5) British Library Add. MSS., 27799-159.
- (6) J. Aikin, *A Description of the Country from Thirty to Forty Miles round Manchester* (1795), pp. 238-9, 263, 446.
- (7) French, *op. cit.*, pp. 76-9, 98-9.
- (8) Owen, *op. cit.*, Vol. I, pp. 25-26 (訳51-58頁)。
- (9) D. C. M'Connel, *Facts and Traditions Collected for a Family Record* (1861), p. 137; M'Connel & Co. Ltd., *A Century of Fine Cotton Spinning* (1906), p. 8.
- (10) Owen, *op. cit.*, Vol. I, pp. 25-26 (訳51-58頁)。
- (11) *Ibid.*, Vol. I, p. 26 (訳58頁)。
- (12) *Parliamentary Papers*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 317.
- (13) *The Universal British Directory*, III (1795), p. 807.
- (14) Aikin, *op. cit.*, p. 446.
- (15) W. H. Chaloner, 'Robert Owen, Peter Drinkwater and the Early Factory System in Manchester, 1788-1800', *Bulletin of the John Rylands Library*, Vol. 37 (1957), p. 91-94.
- (16) *Manchester Mercury*, 18 February 1794.
- (17) *Manceester Herald*, 1 September 1792.

- (18) G. Unwin, *Samuel Oldknow and the Arkwrights* (1924), pp.123, 128, 132;
Manchester Mercury, 5 July 1791.
- (19) *Manchester Mercury*, 4 August 1795.
- (20) S.D. Chapman, 'Fixed Capital Formation', pp.69-70.
- (21) Royal Exchange Assurance Company MSS. (Gildhall Library), Fire Policy Registers, 2nd Original Ser., Vols. 29-31 (1793-1796); Sun Insurance Office MSS. (Gildhall Library), County Department: Policy Registers, Ser. CD, Vols. 7-12 (1794-1796).
- (22) Kennedy, *Observations*, p.15.
- (23) salesman や agent を雇って糸の販売先を獲得することは出来たが、勿論それにはある程度の資金力が必要であり、小親方の多くが選択可能な方法ではなかった。
Edwards, *op. cit.*, pp.131-2.
- (24) Dobson & Barlow Ltd., *Samuel Crompton* (1927), p.31.
- (25) S.J. Chapman, *op. cit.*, p.63; Edwards, *op. cit.*, pp.131, 134.
- (26) *Ibid.*, pp.134, 136.
- (27) S.J. Chapman, *op. cit.*, pp.63-4.
- (28) Edwards, *op. cit.*, pp.131-2.
- (29) P. Colquhoun, *An Important Crisis in the Calico and Muslin Manufactory in the Great Britain*(1788), p.4; Anon., *Case of British Cotton Spinners and Manufacturers of Piece Goods* (1790), Appendix; D.M'Cpharson, *Annals of Commerce, Manufactures, Fisheries, and Nazigation*, Vol. IV (1805), p.528; B.P. Dobson, *The Story of the Evolution of the Spinning Machine* (1911), pp.110-111.
- (30) Colquhoun, *op. cit.*, p.4; *Case of British Cotton Spinners and Manufacturers*, Appendix; D. Bythell, *The Handloom Weavers* (1969), p.31.
- (31) Board of Agriculture, *General View of the Agriculture of the County of Lancaster* (1795), p.180.
- (32) A.L. Bowley, *Wages in the United Kingdom in the Nineteenth Century* (1900), p.131.
- (33) Kennedy, *Brief Notice*, p.17.
- (34) Owen, *op. cit.*, Vol. I, p.25 (訳52頁).
- (35) *The Universal British Directory*, III.
- (36) M'Connel & Co. Ltd., *op. cit.*, p.9.
- (37) *The Universal British Directory*, III.
- (38) M'Connel & Co. Ltd., *op. cit.*, p.10; *Manchester Mercury*, 8 February 1791.
- (39) *Gentleman's Magazine*, March 1804, p.283.
- (40) French, *op. cit.*, pp.76-9, 98-9.
- (41) R. Boyson, *The Ashworth Cotton Enterprise* (1970), p.4.

4 19世紀前半の綿紡績業

（1）準自動ミュール紡績工場の出現

1790年代末から19世紀初頭のミュール紡績業の発展は技術体系の転換を伴った。従来使用されていた手動ミュールに代わって準自動ミュールが普及したのである。この準自動ミュールはその後イギリス綿紡績業の中心的な技術体系と⁽¹⁾なった。

手動ミュールの自動化は1790年代初頭に試みられた。最初にニューラナーク工場の経営者ウィリアム・ケリーが「完全に全ての動きを自動的に行う自動ミュール」を完成し、92年に特許を取った。⁽²⁾続いて、マンチェスタのウィリアム・ライトはケリーの手法を応用し手動ミュールにおける後退工程を自動化し⁽³⁾たダブル・ミュールを開発した。

しかし、どちらのミュールも殆ど一般に普及しなかった。というのは、両者とも太糸生産しか出来なかったからであった。いうまでもなく、ミュール紡績機の長所は、ジェニー機やアークライト機では作れない細糸を生産しうるところにあったが、ケリーの自動ミュールもライトのダブル・ミュールも共にミュール紡績機本来の長所を損なうものであったのである。⁽⁴⁾

こうした限界を克服し、細糸生産が可能で自動化されたミュールを開発したのがジョン・ケネディであった。彼はライトのダブル・ミュールの基本原理を利用して細糸生産が可能な準自動ミュールであるダブル・スピード・ミュール⁽⁵⁾の開発に93年頃成功した。このケネディの開発したダブル・スピード・ミュールが19世紀イギリス綿紡績業の発展を支えて行くのである。

しかし、ケネディの準自動ミュールの普及は90年代末を待たねばならなかった。マンチェスタで始めてミュールに蒸気力を適用した工場、即ち最初の準自動ミュール工場はドリンクウォーターのバンク・トップ工場であったと言われている。ケネディの開発直後に、当時バンク・トップ工場の経営者であったロバート・オウエンは、その機械を見て工場への導入計画を立てたが、実際の導

入はオウエンの後に経営者になったロバート・ハンフリーズによってなされて
 おり、それは早くとも95年のことであつたと推測できる。また『マンチェス
 タ・マーキュリ』に準自動ミュールの広告が最初に掲載されるのも95年であつ
 た。⁽⁶⁾
⁽⁷⁾だが、当時マンチェスタの紡績業者であつたトマス・ホールズワースは、
 97年頃でも「マンチェスタの仕事は手によって行われていた」と述べているよ
 うに、⁽⁸⁾90年代の半ばまでは準自動ミュールは余り普及しなかつた。手動ミュー
 ル自体導入されたばかりであり、また、93年恐慌の影響もあり、その普及は90
 年代末の工場設立ブームを待たねばならなかつたのである。

⁽⁹⁾そのブームは1797年から1802年にかけて起こつた。その中で、手動ミュール
 に取って替わり準自動ミュールが急激に普及するとともに、イギリス綿紡績業
 はその地位を不動のものにしたのである。

ポルトン有数の機械製造業者ドブスン&ロウスウェルが、最初に準自動ミュー
 ルの販売を行うのは98年のことであり、それ以降彼らは手動ミュールの生産
 を止め、準自動ミュールを数多く製造している。⁽¹⁰⁾準自動ミュールの開発者であ
 るケネディの会社であるマコンネル&ケネディは、97年に自分達の紡績工場に
 初めて準自動ミュールを導入するとともに、⁽¹¹⁾工場設立ブームの中で、準自動ミ
 ュールの生産に忙しい日々を送らねばならなかつた。彼らは、1799年には「全
 てのマンチェスタの機械工はひどく忙しい……この夏には6つか8つの新しい
 ミュール紡績工場が出来る」と述べ、⁽¹²⁾1802年には「当地では綿紡績業は引き続
 きとても繁榮しており、この夏には約20もの新工場が建てられている」と述べ
 ている。⁽¹³⁾

この工場設立ブームの中で、マンチェスタには、少なくとも52以上の準自動
 ミュール工場が出現した。⁽¹⁴⁾90年代には殆ど紡績工場がなかつたステイリィブリ
 ッジでも、1803年には11ものミュール紡績工場が現れている。⁽¹⁵⁾1804年に出版さ
 れた『マンチェスタ・ガイド』は、「マンチェスタには知らない人の好奇心を
 かきたてる蒸気力工場がある。その数は93で、その内の1つだけが手動工場
 である」と述べている。⁽¹⁶⁾

そして、この工場設立ブームにおける手動ミュールから準自動ミュールへの

急激な技術革新の中で、小親方の多くはその姿を消した。ある紡績工は1818年に次のように述べている。

「数年で事態は変化した。蒸気機関が使用され始め、蒸気機関と600—700人の労働者を充分収容できるビルを建てるのに、大きな資本が必要になった。エンジンの力は、小親方が同じ価格で作れたものよりも、良くはなくても市場に合った品を生産出来た。その結果、短期間で彼らは破産した⁽¹⁷⁾」。

この90年代末から1800年代初頭の工場設立ブームがミュール紡績業における家内工業の痕跡を消滅させ、同時に工場制度を一般的なものとしたのであった。工場の規模は手動ミュール時代に比してより巨大化し、数多くの大規模工場が出現した。1803年の段階で、すでに総紡錘数3万4000にも昇る工場が現れている⁽¹⁸⁾。この工場は少なくとも100台以上のミュールが装備され、その固定資本だけでも3万ポンドにもものぼったものと推測出来る⁽¹⁹⁾。また、1811年の所謂クロンプトン調査によれば、1万紡錘以上の工場は573工場のうち101工場も存在している。だが、そうした大企業の他方には多くの小規模企業が併存していた⁽²⁰⁾。同じ調査によれば、2500紡錘以下の工場が208もあったことが分かる。そうした小規模企業の多くは工場賃貸制などを利用して依然として委託紡績の仕事に従事していた⁽²¹⁾。勿論、そうした小規模企業であっても90年代に存在した小親方の紡績場に比べれば、その資本規模は大きかったことはいうまでもない。また、小規模な企業が数多く残存したとはいえ、中位・上位規模の企業による産業の支配は明らかであった。19世紀のランカシャー綿紡績業では、小規模と中位・上位企業の併存といういわば二重構造を呈しながらも、後者の支配的地位は不動であった⁽²²⁾。

（2） 商人資本家による産業の制覇

それでは19世紀の綿紡績業者は1790年代の時期と同じように商人資本家出身者が多数を占めていたのであろうか、それとも、違ったボタンが検出されるのであろうか。最近の研究の一部も、19世紀の綿紡績業者の多数は「卓しい生まれ」の者が努力して綿紡績業者になった主張するものもあるが⁽²³⁾、多くの詳細な近年のリサーチはそれとは違った結果を明らかにしている。

表 6 1811年オルダム綿紡績業者の職業経歴

職 業 経 歴		人 数
繊維産業	帽子製造業者	3 (6)
	商人 (chapman)	3 (6)
	織布工	3 (6)
	綿工業小親方	2 (4)
	労働者	2 (4)
非繊維工業	大地主	11 (21)
	小地主	7 (13)
	炭鉱主	7 (13)
	宿屋主人	3 (6)
	小麦粉線売商人	2 (4)
	機械工 (mechanic)	1 (2)
	製靴工	1 (2)
	組立工 (machine maker)	1 (6)
不 明		6 (12)
合 計		52(100)

〔典拠〕 Honeyman, *Origin of Enterprise*, p. 91.

フォックスは19世紀中葉のランカシャの繊維企業家70人の社会的起源と経歴を調査し、その多くが以前から繊維業関係の仕事に従事する中流階級出身者によって占められていることを明らかにしている。²⁴ また、ハウは19世紀のランカシャの繊維資本家 351 人の起源を調査し、うち 281 の綿工業資本家の約51%に当たる 154 人が肉親からの相続によって資本家の地位を獲得しており、しかも残りの自分の代に資本家になった者の場合、その多くが商人出身者によって占られ、小生産者出身者が数少ないことを明らかにし、「セルフ・メイド・マン」の命題、即ち小生産者の発展説が妥当しないことを分析の結果として述べている。²⁵

なお、これらのリサーチは任意のサンプル調査であるので、その結果は完全なものとはいえない。また、ギャトレルが述べているように、19世紀中葉に巨大企業としてランカシャ綿紡績業に君臨した企業の多くは、ナポレオン戦争終結時の1815年頃にはすでにその規模は大きく、彼らはナポレオン戦争期に新技術の開発選択と利潤再投資によってその地位を築いたとする説を考慮すれば、²⁶ 19世紀初頭においては小生産者の発展が産業の急激な成長を支えていたとも考

表 7 1811年ボルトン綿紡績業者の職業経歴

職 業 経 歴		人 数
繊維業	ファスチアン製造業者	15 (20)
	モスリン製造業者	9 (12)
	漂白業者	7 (9)
	商人 (chapman)	3 (4)
	織布工	2 (3)
	キルティグ製造業者	2 (3)
	綿製造業者	2 (3)
	製革工	1 (1)
	帽子製造業者	2 (1)
	掛け布団製造業者	1 (1)
	綿プリント業者	1 (1)
	呉服商	1 (1)
	商人	1 (1)
非繊維業	地主	10 (13)
	小売商	4 (5)
	銀行家	2 (3)
	機械組立工	2 (3)
	農夫	1 (1)
	鉄器商人	1 (1)
	車大工	1 (1)
不 明		8 (11)
合 計		76 (100)

〔典拠〕 Honeyman, *Origin of Enterprise*, p.99.

えられよう。

だが、ハニマンのリサーチはこうした考え方に対して有力な批判を提供してくれる。彼女によって行われたリサーチは、ナポレオン戦争中の1811年におけるオルダムとボルトンの綿紡績業者を全数調査したものである。その調査の結果を集計したものが表6と表7であるが、比較的中位・上位の企業が多いボルトンだけでなく、工場賃貸制を利用した比較的小規模な企業が多く、かつ従来ミュール紡績業の小生産者的発展を代表する都市と言われてきたオルダムでさえ、前者では商人や商人的製造業者の起源を持つ者が、後者では地主や炭鉱主の起源を持つ者が、綿紡績業者の大半を占めていたことが分かる。そして、彼女はこの調査から、「卑しい生まれ」の紡績業者もいたが、彼らの多くは没落し、これに対して、地主や有力商人といった以前からのエリート団体のメンバーや繊維産業における商人や商人的製造業者が当時の綿紡績業においてリーダー

ーシップを取っていたのであり、この時期の産業の指導者の多くが、19世紀以前のエリート集団と一致していると結論づけているのである。⁽²⁸⁾

ところで、ナポレオン戦争期の利潤率は、現在残存している経営資料によれば、19世紀中葉よりも高位であったことが分かっているが、全ての企業がそうした高利潤率を享受出来たわけではなかったといえよう。当時の景気循環は綿紡績業者にとって厳しいもので、彼らはハイ・リターンを期待出来たと同時にハイ・リスクを覚悟しなければならなかったのである。事実、90年代に綿紡績業に参入した企業のかなりの部分が、倒産や撤退を余儀なくされている。マンチェスタについて見ても、90年代の綿紡績企業96社のうち、18世紀末から19世紀初頭の工場設立ブームの中で新しく準自動ミュール紡績業者となったのは、たった7—8年の間にもかかわらず28社で、その残存率は約29%であり、1811年のクロプトン調査の時点では20社で、その残存率は約21%であることが分かる。⁽²⁹⁾
⁽³⁰⁾

そして、こうしたハイ・リスクかつハイ・リターンの時期において産業の成長の原因となったのは、ギャトレルが示唆したように、小規模企業の利潤再投資による急激な成長にあったのではない。このことをマンチェスタの綿紡績業について見てみよう。

19世紀初頭のマンチェスタの中位・上位企業の出身階層を調べたものが付録3である。このマンチェスタの事例のなかには、従来、一部の研究者によって、「卑しい生まれ」の「セルフ・メイド・マン」として成功した典型的な企業としてあげられる、マコンネル&ケネディ、トマス・ホーズワース、A&G・マリなどが含まれている。しかし、彼らの企業の成長は所謂小生産者の成長であったとはいいがたい。なぜなら、彼らはいずれも単なる綿紡績業者として仕事を始めたのではない。彼らはいずれも綿紡績機械製造業者として仕事を始めているとともに、優れた技術者としても有名であった。つまり、彼らの企業の急激な成長の原因はいわばイノベーターとしてのメリットを享受出来たところ⁽³¹⁾に存在するといえよう。

その上、マンチェスタ全体では、依然として商人資本家出身者が多数を占め

ていることが分かる。しかも90年代において参入した者だけではなく、その後綿紡績業に新しく参入した者も数多い。つまり、19世紀初頭の綿紡績業の急激な成長は、90年代の時期と同様なパターン、即ち、商人資本家の綿紡績業への新規参入によって、主としてもたらされたと見る事が出来よう。リスクを厭わない果敢な商人資本家による綿紡績業への大規模な資本投資が産業の発展を強く支えたのである。

いずれにせよ、19世紀前半にランカシャの綿紡績業者になった者の多くは、小生産者としてミュール紡績業を始めた者ではなかったといつてよい。産業革命期イギリス綿紡績業は、今まで信じられていたのとは違って、商業から工業への大規模な資本移動がもたらしたといわねばならない。但し、勿論、小生産者出身者が小規模紡績業者になる可能性が全くなかったわけではないし、彼らがある程度事業を拡大することもあった。だが、そうした事例は非常に例外的であっただけでなく、それを詳しく見てみると、彼らが必ずしも自らの力だけで小生産者の発展を遂げたわけではないことが分かる。⁽³⁾ともあれ、産業革命期のイギリス綿紡績業の急激な成長は、農村家内工業あるいはプロト・インダストリーからの漸進的発展によって生み出されたのではなく、商人資本家の新規参入が数多く連続した所に、その最大の原因が存在するといわねばならないのである。

注

- (1) ここで言う準自動ミュールとは、手動式ミュールをいわば半分自動化したもので、19世紀には hand mule とも呼ばれることがあったが、完全手動式のミュールや1825年にロバート・ロバーツが開発する自動ミュールと区別するために準自動ミュールと呼ぶことにした。なお、言うまでもなく、ロバーツの自動ミュールは、発明後もイギリスでは余り普及せず、19世紀イギリスの綿紡績工場でもっとも使用されていたのが、ここでいう準自動ミュールであった。L. G. Sandberg, 'American Rings and English Mules', *Quarterly Journal of Economics*, LXXXIII (1969), pp. 99-100.
- (2) Kennedy, *Observations*, p. 17; idem, *Brief Memoir*, p. 22; A Letter from Kelly to Kennedy in Baines, *op. cit.*, p. 206.
- (3) ダブル・ミュールの発明者をケネディは「マンチェスタの優れた機械製造業者ライト」と記しているが (Kennedy, *Brief Memoir*, p. 22), 90年代のマンチェスタ

にはライトという姓の機械製造業者はウィリアム・ライトしかいないので、おそらく彼がケネディのいう「ライト」であろう。ウィリアム・ライトはアークライトの紡績工場の機械工であったが、遅くとも90年代の初めにジョン・ホワイトとライト & ホワイトを結成し、綿紡績機械の製造販売を行うだけでなく、綿紡績業者として活動している。だが、ダブル・ミュールなどの販売が芳しくなかったのか、彼らの会社は94年1月7日に倒産し、95年にはライト1人で機械製造業を再開しているが、その時彼はダブル・ミュールではなくジュニー紡績機や梳綿機の製造販売をおこなっている。ところが、19世紀に入って、ライトはマンチェスタの産業界からその姿を消した。Ibid., pp.22-23; *The Universal British Directory*, III; *Manchester Mercury*, 17 Dec. 1793, 7 Jan. 1794, 31 March 1795. なお、ライトはダブル・ミュールを開発した功績により、クロンプトンと同じ様に、12年に議会から5000ポンドの褒章金を与えられたと伝えるものがあるが（J. Wheeler, *Manchester, Its Political, Social and Commercial History, Ancient and Modern*, 1836, p.160; R. Burn, *Statistics of the Cotton Trade*, 1847, p.30), *Journal of House of Commons* には該当する記録を見つけることが出来ない。

- (4) 両者とも40—50番手の太糸生産しか出来なかった。A Letter from Kelly to Kennedy in Baines, *op. cit.*, p. 206; Kennedy, *Brief Memoir*, p. 23; Fairbairn, *op. cit.*, p. 4. なお、アークライト紡績機は約50番手まで、ジュニー紡績機は約30番手まで製造できた。J. Montgomery, *The Carding and Spinning Master's Assistant* (1832), p. 152; Aspin, *op. cit.*, p. 44.
- (5) Fairbairn, *op. cit.*, p. 4; Kennedy, *Brief Memoir*, pp. 25-27.
- (6) Ibid., pp. 27-8; Chaloner, *op. cit.*, pp. 94, 98.
- (7) *Manchester Mercury*, 26 May 1795.
- (8) P.P., 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 234.
- (9) Edwards, *op. cit.*, pp. 12-5.
- (10) Dobson, *op. cit.*, pp. 110-112.
- (11) Lee, *op. cit.*, pp. 101-102.
- (12) M'Connel and Kennedy MSS. (John Rylands Library), A Letter to R. Buchanan, 24 July 1799.
- (13) M'Connel and Kennedy MSS., A Letter to J. Thornton, 1 May 1802.
- (14) P.P., 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 341.
- (15) *Lords Sessional Papers*, 1819, XIII, *An Account of the Cotton and Woollen Mills and Factories*, p. 51.
- (16) J. Aston, *The Manchester Guide* (1804), p. 278.
- (17) British Library Add. MSS., 27799-157.
- (18) L.S.P., 1819, XIII, *An Account of the Cotton and Woollen Mills and Factories*, p. 51.
- (19) 当時ミュール1台の紡錘数は多くとも300を越えなかった。また、32年でミュール1紡錘当たりで工場の固定資本規模は17リングペンスに相当するという数字を

- 利用して計算した。M. Blaug, 'The Productivity of Capital in the Lancashire Cotton Industry during Nineteenth Century', *Economic History Review*, 2nd Ser., XIII (1961), p. 371.
- (20) G. W. Daniels, 'Crompton's Census of the Cotton Industry in 1811', *Economic History*, II (1930), p. 109.
- (21) R. Lloyd-Jones and A. A. LeRoux, 'The Size of Firms in the Cotton Industry: Manchester, 1815-1841', *Economic History Review*, 2nd Ser., XXXIII (1980), p. 72; idem, 'Marshall and the Birth and Death of Firms: The Growth and Size Distribution of Firms in the Early Nineteenth Century Cotton Industry', *Business History*, XXIV (1982), pp. 143-4, 146-7.
- (22) なお、ギャトレルは19世紀のランカシャー綿紡績業においては大企業ではなく小規模企業が支配的であったとしているが、彼が言う大企業とは労働者数 500 人以上のものであり、ロイドジョーンズたちは、これに対して中規模企業の支配性を主張しているが、彼らのいう中規模企業とは 150 人から 500 人の企業になっている。ここでは、ロイドジョーンズらの説に従っているが、少なくとも、雇員人数 150 人以下の小規模企業が支配的であったわけではないことには注意すべきであろう。Gatrell, *op. cit.*, p. 100; Lloyd-Jones and LeRoux, 'The Size of Firms', pp. 74-75.
- (23) Farnie, *op. cit.*, pp. 209-210.
- (24) Fox, *op. cit.*, p. 123.
- (25) Howe, *op. cit.*, pp. 7-15, 52-54.
- (26) Gatrell, *op. cit.*, pp. 95-96.
- (27) マントゥは小生産者の発展の事例としてオルダム綿紡績業者をあげ、大塚はその研究に依拠してイギリス産業革命の小生産者の発展を唱えてきた。Mantoux, *op. cit.*, p. 372 (訳 523 頁)。大塚「近代資本主義の系譜」127-129 頁、同「いわゆる問屋制度をどう捉えるか」164 頁。
- (28) Honeyman, *op. cit.*, pp. 108-9.
- (29) Howe, *op. cit.*, pp. 24-27.
- (30) G. W. Daniels, 'The Cotton Trade during the Revolutionary and Napoleonic Wars', *Transactions on the Manchester Statistical Society* (1915-16), pp. 55-80; Edwards, *op. cit.*, chap. 2.
- (31) それぞれの年度のマンチェスタの紡績業者は、95 年については火災保険調査（表 3，付録 1-2），02 年については *P. P.*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 341, 11 年については Statistics obtained in 1811 by Samuel Crompton (Typescript, Manchester Central Library) によって特定した。なお企業の改組が見られても、同一人物が残っている場合は存続していると判断し、また世襲された企業と思われるものについても残存したものとして、それぞれ生き残った企業の数に含めた。なお、同じことを 34 年について調べてみると、95 年の紡績業者が 18 社残っているが、他はその後の参入者であることが分かる。*P. P.*, 1834, XX, *Supplementary Report of Factories Inquiry Commissions*, part II, D. 1, pp. 120-

275.

- ③2 マコンネル & カンパニーは、いうまでもなく、準自動ミュールを開発したジョン・ケネディの企業であり、ジェイムズ・ケネディはジョンの兄弟であった。A & G・マリは準自動ミュールを逸早く製造した業者であり、トマス・ホーズワースもパートナーであった兄弟のヘンリが優れた技術者として有名であった。Kennedy, *Brief Notice*, pp. 4, 9-10; idem, *Brief Memoir*, p. 27; R. L. Hills, *Power in the Industrial Revolution* (1970), p. 84. また、彼らの他に、こうした技術革新者の綿紡績業者としてあげることが出来る者にピーター・エヴァートがいる。W. C. Henry, 'A Biographical Note of the Late Peter Ewart, Esq.', *Memoirs of the Literary and Philosophical Society of Manchester*, 2nd Ser., VII (1846).
- ③3 彼らが事業に成功している数少ない事例を見ると、その多くは資金力あるパートナーとの資本結合や資産家の家族との婚姻などによって成功の機会を獲得していることが分かる。Howe, *op. cit.*, pp. 10; Honeyman, *op. cit.*, pp. 92-7.

5 おわりに

ここでのリサーチから、次のことがいえるであろう。

ミュール紡績業の実質的な出発点は1780年代末からであり、農村家内工業あるいはプロト・インダストリーとして充分なる成長を遂げることなく、90年代の最初の急激な成長期を迎えた。この発展を担ったのは、小親方の紡績場とそれとは区別される工場主の工場であったが、産業全体の資本形成については後者が決定的な役割を果たしていた。小親方は商人資本家により問屋制支配され、彼らの経営規模の拡大は非常に困難であった。これに対して工場主は、一方で工場生産を行いながらも、他方では小親方や小生産者を問屋制支配する商人資本家であっただけでなく、彼らの多くの綿紡績業参入以前の職業は商人であった。1790年代の最初のミュール紡績業の急激な成長は、商人資本家の手動ミュール紡績業への参入、すなわち商人資本的蓄積の中で形成された資本の移動が最大の原因であった。

続く90年代末から19世紀初頭にかけてミュール紡績業は新たな発展を開始した。非常に短期間の内に新しく開発された準自動ミュールが手動ミュールに取って代わり、小親方の多くが没落する他方で大規模な工場が数多く現れ、その後の綿紡績業発展の基礎を形作った。資本規模は全体的に大きくなり、多くの

産業革命再考（田中）

大紡績業者が出現した。但し、工場賃貸制を利用し依然として委託紡績を行う小規模企業も残存したが、中位・上位企業の優位性は変わらなかった。

そして、この時期の成長のバタンも90年代のそれと同質的であった。一部の所謂イノベーター的な性格を持った企業は事業の拡大に成功したが、多くの小規模企業はそれに失敗した。また、数少ないそうした事例も、多くは資本結合などによって外部の資本に依存した資本蓄積をおこなっていた。また、この時期においても、綿紡績業者の多くは商人資本家出身者で占められており、彼らがイギリス綿紡績業を支配していたのであった。しかも、19世紀に入ってからミュール紡績業は競争が激しく、ハイ・リスクな産業であったが、この時期においても、商人資本家の新規参入が絶え間なく連続したことが、産業の急速な成長の主たる原因であった。

こうしたリサーチの結果からすれば、産業革命期イギリス綿紡績業が小生産者の発展をたどったわけではないことは明らかであろう。却って逆に、商人資本家のミュール紡績業への積極的な参入が綿紡績業における産業革命を生み出したといえよう。いいかえれば、商業部門において形成された資本が新産業である綿紡績業に大量かつ急激に移動したことがイギリス産業革命の大きな原因であった。イギリス産業革命は、それ以前における商品経済の発展と商人資本的蓄積の拡大をその前提条件とし、新しい工場生産への進出という積極的なビヘイヴィア⁽¹⁾を多くの商人資本家が選択したことがその実現をもたらしたといつてよい。少なくとも、イギリスの綿紡績業は所謂小生産者の発展をたどったわけでも、プロト・インダストリーからモダン・インダストリーへの漸進的な発展をたどったわけでもない。その成長を支えたのは、外部の商業部門からの綿紡績業への大量の資本流入であったのである。

注

- (1) こうした意味から、宇野弘蔵の議論が再評価されてよいものと思われる。とりあえず、宇野弘蔵『経済政策論』上巻（弘文堂書店、1936年）、同『経済政策論』改訂版（弘文堂、1971年）参照。

付録 1 1795年マンチェスタの商人資本家出身の綿紡績業者

企 業 名	資産額	参入以前の職業
(1) John, Thomas & Samuel Haigh	16,300	merchants
(2) Daivid Holt	15,000	fustian merchant
(3) Peter Drinkwater	10,200	fustian merchant
(4) John Nash	10,200	calico printer & manufacturer
(5) John Simpson	9,700	fustian merchant
(6) Heywood & Palfreyman	9,700	cotton merchants
(7) Nash & Abbott	8,850	calico printers & manufacturers
(8) Joseph Thackary	7,950	manufacturer
(9) Jackson, Sykes & Rushforth	5,400	irish linen merchants & manufacturers
(10) Philips, Woods & Lee	5,000	fustian merchants
(11) John Simpson & John Barton	5,000	fustian merchants
(12) Ackers, Beaver & Ransbottom	5,000	twist manufacturers
(13) William Faulkner	4,250	fustian manufacturer
(14) James Lees & Co.	3,400	cotton manufacturers
(15) James & George Olivant	3,300	cotton manufacturers
(16) Robert Buckley	3,200	muslin manufacturer
(17) James Lees	3,200	cotton manufacturer
(18) Ellias Needham	2,600	fustian manufacturer
(19) Bale & Packharnis	1,700	cotton manufacturers
(20) John Reed	1,500	cotton manufacturer
(21) Smith & Unsworth	1,500	merchants
(22) Samuel Marsland	1,350	cotton manufacturer
(23) Alexander Eglsome	1,200	merchant
(24) John Swindells	1,000	cotton manufacturer
(25) Henry Hallam & John Thomas	1,000	cotton manufacturers
(26) Richard Alsop & Co.	1,000	cotton manufacturers & merchant
(27) B. & W. Sandford	1,000	fustian merchant
(28) William Robinson	900	cotton merchant
(29) Thomas Lomas & William Gosling	760	cotton merchant & warehouseman
(30) Samuel Philips	400	fustian manufacturer
(31) William Gerrard	300	cotton manufacturer
(32) Thomas Royle	300	warehouseman
(33) John Gerrad	150	cotton manufacturer
(34) John Kenworthy	145	cotton manufacturer
合 計	£ 142,455	

〔典拠〕 Royal Exchange Assurance Co. MSS., Registers, 2nd Ser., vols. 28-31 (1793-1796); Sun Insurance Office MSS., Registers, Ser. CD, vols. 7-12 (1794-1796) は、それぞれを R, S と略し、巻数、火災保険登録番号（例えば R29/143434）で示す。

(1) S7/638227; S.D. Chapman, 'Fixed Capital Formation', p.95. (2) R31/149003; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.94. (3) R29/143469; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.94. (4) S8/638534; *The Universal British Directory* (以下 *UBD* と略), III. (5) R29/143789; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.94. (6) R29/147376; *UBD*, III. (7) S12/646727; *UBD*, III; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.95. (8) S9/640660; *UBD*, III. (9) R29/146061; *UBD*, III. (10) S9/644316; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.94. (11) S7/638231; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.94. (12) R29/144294; *UBD*, III. (13) R29/143794; *Lewis's Manchester Directory for 1788* (以下 *Directory for 1788* と略). (14) R29/146854; *UBD*, III. (15) S9/640945; *UBD*, III. (16) R29/143668; *Directory for 1788*. (17) R29/147369; *UBD*, III. (18) R30/145971; *Directory for 1788*; *UBD*, III. (19) S10/648075; *UBD*, III. (20) R30/145585; *UBD*, III. (21) R30/147577; *UBD*, III. (22) S9/641340; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.94. (23) R29/147372; *UBD*, III. (24) R29/143799; *UBD*, III. (25) R29/148239; *UBD*, III. (26) S8/638973; *UBD*, III. (27) R30/147568; Kennedy, *Brief Notice*, p.17. (28) R29/148240; *UBD*, III. (29) R30/145580; *UBD*, III. (30) S9/640944; *UBD*, III. (31) R29/147764; *UBD*, III. (32) S9/644225; *UBD*, III. (33) R29/143461; *UBD*, III. (34) R29/143812; *UBD*, III.

付録 2 1795年マンチェスタの「下層」階級出身の綿紡績業者

企 業 名	資産額	参入以前の職業
(1) R. Duck & C. Potts	5,200	Robert Peel's servants
(2) John Pooley	2,100	joiner
(3) Adam Murray	1,750	machine maker
(4) William Wright	1,000	machine maker
(5) James McConnel & John Kennedy	1,000	machine makers
(6) W.T. & H. Houldsworth	1,000	machine makers
(7) Thomas Woolstencroft	300	weaver
合 計	£ 12,350	

〔典拠〕 (1) S9/644231; S.D. Chapman, *op. cit.*, p.95. (2) S8/638969; *UBD*, III. (3) R30/145576; Kennedy, *op. cit.*, p.9. (4) R30/145969; 本論文, 52-53頁. (5) R30/144530; Kennedy, *op. cit.*, p.9. (6) R30/145579; Howe, *Cotton Masters*, p.9. (7) R29/148205; *UBD*, III.

付録 3 19世紀前半のマンチェスタの主要綿紡績業者

企 業 名	労働者数(年度)	参入以前の職業	1795年後 の新規参 入者
中流階級出身者			
(1) Birley & Co.	1,692(1834)	fastian merchants	○
(2) Philips & Lee	937(1816)	fastian merchants	—
(3) William Mitchell & Co.	676(1818)	manufacturers	○
(4) Hugh Beaver	525(1834)	privater	○
(5) Ancoats Cotton Twist Co.	504(1818)	merchants	○
(6) Peter Marsland	465(1816)	cotton manufacturer	—
(7) James & John Potter	444(1834)	merchants	○
(8) Thomas Harbottle	401(1834)	muslin manufacturer	○
(9) Benjamin Sandford	382(1834)	warehouseman	—
(10) Nash, Greenway & Co.	337(1818)	printer & manufacturers	—
(11) John & Richard Simpson	334(1818)	fustian manufacturers	—
(12) David Holt	320(1816)	fustian merchant	—
(13) Benjamin Potter	301(1816)	merchant	○
職人出身者			
(14) M'Connel & Co.	1,545(1834)	machine makers	—
(15) A. & G. Murray	1,215(1816)	machine makers	—
(16) Thomas Houldsworth	1,201(1834)	machine maker	—
(17) James Kennedy	599(1834)	machine maker	○
(18) Pooley & Son	514(1834)	joiner	—
不明			
(19) Oxford Road Twist Co.	774(1834)	—	○
(20) T. R. & T. Ogden	712(1834)	—	○
(21) Thomas Marriott	649(1816)	—	—
(22) Jonathan Pollard	475(1818)	—	○
(23) New Bridge Mills Twist Co.	450(1834)	—	○
(24) Dacca Twist Co.	348(1834)	—	○
(25) Benjamin Naylor & Co.	342(1816)	—	—

〔注〕 労働者数は、1834年までの時期でもっとも多い時を取った。また、資本家の引退や企業の改組により、企業が変動している場合は、創業者の工場主以前の職業を参入以前の職業とした。

〔典拠〕 雇用労働者総数が300人以上のマンチェスタの綿紡績企業を対象にし、それぞれ、1816年のものは *P. P.*, 1816, III, *Report on Children in Manufactories*, p. 374, 1818年のものは *L. S. P.*, 1818, *Minutes of Evidence on the Cotton Factories Bill*, Appendix, 1834年のものは *Ure, The Cotton Manufacture of Great Britain*, I, pp. 334-7 によっている。参入以前の職業は、次の通り、(1) *Edwards, The Growth of*

the British Cotton Trade, pp.194, 255-8. (2) 付録 1. (3) *UBD*, Ⅲ; *Banck's Manchester and Salford Directory for 1800*. (4) Howe, *op. cit.*, p.11. (5) *P.P.*, 1816, Ⅲ, *Report on Children in Manufactories*, p.575-6. (6) 付録 1. (7) *UBD*, Ⅲ; *Dean's Manchester & Salford Directory for 1808 & 1809* (以下 *Directory for 1808* と略). (8) *Pigot and Dean's Directory for Manchester, Salford, & c. for 1824-5*. (9) 付録 1. (10) 付録 1; *P.P.*, 1816, Ⅲ, *Report on Children in Manufactories*, p.341. (11) 付録 1. (12) 付録 1. (13) *UBD*, Ⅲ; *Directory for 1808*. (14) 付録 2. (15) 付録 2. (16) 付録 2. (17) Kennedy, *Brief Notice*, p.4. (18) *UBD*, Ⅲ; S8/638969.